

# 人民中国

## PEOPLE'S CHINA

3

March 2019

定価400円

1956年12月18日 第3種郵便物認可  
2019年3月5日発行  
(毎月1回5日発行)通巻789号

中国を知るための  
日本語総合月刊誌

特集

今年の中国経済  
改革・開放・協力で安定成長

美しい中国 攀枝花

余生を満喫できる常春都市



Twitter



WeChat

www.peoplechina.com.cn



# 中日大学生500人交流 両国の未来を語り合う

中日両国は、国交正常化45周年と平和友好条約締結40周年という節目の年を続けて迎えた。この二つの記念すべき年に、北京では2年連続で中日両国の大学生1000人の交流イベントが開催された。それに呼応する形で、日本の外務省が「日中植林・植樹国際連帯事業」として、中国人大学生を日本に招き、日本の大学生と500人規模の交流イベントを行うと呼び掛けた。具体的な準備と実施活動は日中友好会館が担当することになり、私もそれに関わった。

## 温かで充実した交流

200人余りの日本人大学生を集めることができると、どんな交流スケジュールを組むのか、そして実施結果はどうなるのかなどを心配しながら、外務省、各自治体、大学、それから派遣元となる中日友好協会と打ち合わせを行った。その結果、昨年6月に、寧夏回族自治区、湖北省、雲南省、浙江省、河南省から大学生50人ずつを招き、まずは各友好提携先の島根県、長崎県、岩手県、福井県、三重県を訪問してもらい、その後、再度東京で集合し、日本人大学生250人と合わせた総勢500人からなる、中日大学生交流会を行うと決めた。

綿密な準備を経て、昨年11月25日に、私たちは5省・自治区20大学からなる250人の中国人大学生

介していききたい」と語っていたのが印象に残った。

## 両国の未来を語り合う

そして11月30日、各地の訪問を終えた団員たちが東京で集結し、早稲田大学、法政大学、明治大学、日本大学、慶応義塾大学、東京大学など約30大学からの日本人大学生250人と共に「中日大学生交流式典と交流夕食会」に参加した。

私たちは、次世代を担う両国の大学生に自分たちが背負う未来を真剣に考えてもらうため、参加者全員に「10年後に向けて——中日平和友好条約締結50周年の中日関係をテーマとする「未来へのメッセージ」(文字、イラスト、漫画、書道など、いずれも可)を書いてもらう特別企画を用意した。両国の大学生は積極的に参加し、書いてくれた500通のメッセージの内容はどれもみなポジティブで感動的なものだった。



島根県飯南町の森林セラピーで大自然に触れた



交流夕食会で中日両大学生が楽しく交流



色とりどりの500通ものメッセージには両国関係に対する真剣な思いと未来への期待が書かれている

中日友好協会都市経済交流部部长  
(現在日中友好会館駐在、総合交流部部长)  
郭寧文・写真提供



たちを迎えた。一行は東京に着いてから短い滞在の後、すぐにそれぞれが友好提携を結んでいる各県へ赴き、訪問先では至るところで熱烈な歓迎と情熱的なおもてなしを受けた。

私は寧夏回族自治区グループに随行して、島根県を訪問した。島根県庁は代表団の表敬訪問を受けただけでなく、進んで見学のコースまで考えてくれ、さらに全日程にも同行してくれた。島根大学での交流活動(記念植樹、昼食会、中日大学生討論会)や松江城、八重垣神社、足立美術館の見学や飯南町森林セラピーの体験など、コースの内容はとても充実しており、中国の大学生たちが同世代の日本人大学生と親密な交流ができたほか、日本文化の神髄までも体験することができた。

飯南町の森林セラピーを体験した際、寧夏回族自治区固原市から来た大学生たちは「私たちのふるさと・六盤山にもこれと似たような景色と景観がある。しかし日本ほど心を込めて保護、活用はされていない。帰国したら、ここで学んだ経験をふるさとに紹

## 青少年交流の新しいチャンス

数年前、双方の交流は一時冷え込んでいたが、民間の草の根レベルの交流は停滞せずに進んできた。民間交流の蓄積があったからこそ、昨年両国首脳の間相互訪問後、両国関係は速やかに回復してきた。民間交流事業には無駄な努力はないと改めて感じた。「継続は力なり」の言葉通り、今後はさらに自信を持ち、努力していく所存だ。

中日関係が今日まで発展してきた、双方のいわゆる「蜜月期」はもう過ぎていくかもしれない。しかし、お互いをもっと成熟した態度で相手と向き合い、小異を残して大同につき、相手の長所を見習って自分の短所を補いながら共に発展していくべきだ。まさに「百聞は一見にしかず」。私たちは両国の青年たちが大いにふれあい、交流し、理解し合う機会を多くつくっていききたい。目下、日本を訪れる中国人は年々増えており、それとは対照的に、中国を訪れる日本人は依然として少ない。日本の若者が中国に触れ、中国を感じ、中国を訪問する機会を増やす必要がある。人民中国雑誌社が5年間続けて主催している「Panda杯全日本青年作文コンクール」は非常に良いイベントだ。作文を通じて中国について考え、受賞者が実際に中国に行き、中国を体験している。今後私たちが手掛ける事業の参考にもなると思う。

日中友好会館は中日双方の共同事業だ。日中友好7団体のうち、最も若い組織として自身の長所を生かし、中日友好事業にさらに大きな貢献をしていきたい。今年は「中日青少年交流推進年」だ。昨年両国首脳が今後5年間で3万人規模の青少年交流を実施していくことで一致し、両国の青少年交流が新たなチャンスを迎えている。10年後にはまたこの500人に集まってもらい、当時書いたメッセージを振り返り、両国の新しい未来を築き上げてほしい。